

競技水準の上昇に伴うラグビー選手の攻撃性の発達

長谷川 悦 示・佐 藤 成 明・竹 田 清 彦

Relation of level of competition to development of aggression in Japanese rugby football players

Etsushi HASEGAWA, Nariaki SATOH and Kiyohiko TAKEDA

The relationship of level of competition to aggression of Japanese rugby football players was examined. Four hundred fifty-five high school, 355 university and 100 community club rugby players answered a questionnaire about aggression in rugby competition (Satoh et al., 1991). The questionnaire was constructed to study two components of aggression : aggression inhibition and aggression motive, subdivided into 7 factors derived from principal component analysis. Aggression inhibition was divided into (a) inhibition to angry retaliatory behaviour, (b) concern about the opponent's injury, (c) fear of contact play, (d) norm of observance of rules. Aggression motive was divided into (e) aggressive self-evaluation, (f) norm of aggression reciprocity, (g) intentional foul play. Each factor was analysed by ANOVA and ANCOVA for aggression in daily life to compare high school vs university players, high vs low performance team players, and regular vs sub-regular vs non-regular players. The main findings were (1) Players in high performance teams tend to behave more aggressively (factor a, b, c) and have more developed aggression motives (e, f, g) than those in low performance teams. (2) Higher level of individual skills was associated with more developed aggression motives (e, f, g) and less developed aggression inhibition (a, b). (3) University players tend to recognise (d) norm of observance of rules more strictly than high school players.

Key words : Aggression, Sports, Competition, Rugby, Japan

問 題

ラグビー選手の競技場面における攻撃性を測定する尺度として、長谷川(1986)⁹⁾は Kornadt(1982, 1984a, 1984b)^{9),10)}の攻撃動機理論に基づいて質問紙の作成を試みた。そして、佐藤ら(1991)¹¹⁾によってその質問紙の因子構造が明らかにされ、またその攻撃性の因子が格闘競技である剣道選手にも存在することが確かめられた。そこで攻撃性の概念は、一般的にいう単純な攻撃的性格のことでなく、2つの動機の要素、すなわち攻撃動機と攻撃抑制を含む個人の反応傾向として捉えられている。

佐藤らはラグビー選手がもつスポーツの競技場面における攻撃性の攻撃動機の成分として、怒りの情緒に関わる衝動的攻撃(ただし怒りの抑制を含む両極因子)、手段的な攻撃である意図的な不当プレイ、攻撃的な自己認知、ルール違反行動に対する肯定的な評価(ただし否定的評価を含み両極因子)、一方攻撃性の攻撃抑制の成分としては、相手の危害への認知的な配慮、接触プレイに対する恐怖心の因子を得た。これらの因子のいくつかは従来からスポーツの攻撃研究で用いられてきた攻撃指標と対応するものであった^{1,2,12,13,14,16,17,18)}。

攻撃動機の発達と個人差に関して Kornadt は、

攻撃動機の体系は個人の置かれた状況的条件との相互作用においてはじめて効力をもつことができ、またその相互作用の質の違いがその個人にとって独自の動機体系を形成する学習経験となる、という仮定に基づいて実証的研究を試みている。

そこで長谷川ら (1991)⁶⁾・市丸ら (1991)⁷⁾はそれぞれ佐藤らの研究におけるラグビー選手と剣道選手のデータについて、選手の属性要因と攻撃性の関連性を検討した。ラグビー選手に関してとりあげられた属性は、高校・大学の発達年齢、個人の競技水準 (レギュラー・準レギュラー・非レギュラー)、ポジション (フォワード・バックス)、及び日常場面での攻撃性の要因であった。また剣道選手に関しては、男子・女子の性、先鋒・次鋒・大将などのポジション、及び日常場面での攻撃性の要因であった。その結果、競技場面における攻撃性は選手の性や日常場面での攻撃性といった個人的要因、またポジションという役割要因に加えて、高校・大学や個人の競技水準といった発達要因により影響を受けることが示された。特に、ラグビー選手の発達要因についての結果をまとめると、技能水準が高くなりレギュラーとして試合の経験の多い選手ほど、故意に不当プレイを加える傾向、自己を攻撃的に評価する傾向が強くなり、反対に接触プレイに対する恐怖心は弱くなった。また競技経験年数や競技水準で明らかに差のある高校選手と大学選手では、大学選手の方が故意に不当プレイを加える傾向が強くなり、逆に相手に危害を加えることに対する認知的な制御や接触プレイに対する恐怖心の傾向が低下した。

ところで、これらの結果は研究対象がすべて全国大会に出場できるような高い競技力を備えた運動部に所属する部員のデータに基づくものであった。したがって、個人の競技水準や高校・大学の発達年齢という要因が、競技力の低いチームに所属する部員の攻撃性の発達に対しても同じように作用しているか、検討することが必要であると思われる。また、競技力の低いチームのデータを加えて、先行研究で得られた攻撃性の因子を確認することができるならば結果の一般性を高める意味で重要であろう。

そこで本研究では、高校と大学の競技力の低いチームに所属する選手、さらに社会人クラブチームに所属する選手に調査対象を拡げて、先行研究の結果を追証し、特に競技水準の上昇に伴う攻撃

性の発達の様相を明らかにすることを目的とする。

まず先行研究と同様の方法でラグビー選手の競技場面における攻撃性の因子構造を明らかにし、日常での攻撃性の因子との関連性の吟味も加えて、先行研究と同一の因子が得られるかを検討する。その上で、選手の攻撃性に与える発達年齢、チームの競技水準、及び個人の競技水準による影響を検討する。最後に、得られた競技場面での攻撃性の因子が、実際の試合場面において選手が実行する攻撃行動を予測する力があるかについて、長谷川 (1990)⁸⁾の作成した怒りの経験質問紙による試合中の怒りの経験尺度との関連性から検討する。

方 法

調査対象

今回の調査対象は、まず高校選手については、平成2年8月、岐阜県吉城郡古川町数河高原における夏期強化合宿中の愛知、三重、岐阜県下の8つのチームに所属する部員225名と、同所で開催された国体地域予選に出場した愛知、岐阜、静岡県代表3チームに所属する117名であった。また大学選手については同じ時期に同所で夏期強化合宿中の東海、北陸、関西地域の7チームに所属する部員142名であった。社会人選手については、平成2年7月、長野県菅平高原で開催された関東社会人クラブ大会に出場した関東地域の8つの社会人クラブチームに所属する137名 (年齢19-38) であった。これらのうち、回答に不備があったデータを除外した有効データ数は計574であった。

これらのデータと先行の佐藤ら (1991)¹¹⁾による全国高校大会に出場した3チームの高校部員145名と、関東大学対抗戦の2チームおよび関東大学リーグ戦の1チームに所属する大学部員221名のデータを併せた計910のデータを分析の対象とした。

チーム及び個人の競技水準

チームの競技水準は調査実施年のチームの実績から次のような基準を設定した。高校については、全国大会及び国体に県代表として出場したチームを上位群とし、それ以下のチームを下位群とした。大学及び社会人については、地域の1部リーグの上位にあるチームを上位群とし、それ以下のチームを下位群とした。また個人の競技水準は個人の技能水準からレギュラー、準レギュラー、非レギュラーの3群に分類した。したがって、表1に示

表1 調査対象の内訳

	上位群				計	下位群				計
	レギュラー	準レギュラー	非レギュラー	不明		レギュラー	準レギュラー	非レギュラー	不明	
高校	108	54	89	3	254	81	44	72	4	201
大学	50	33	138	—	221	54	40	39	1	134
社会人	—	—	—	—	—	54	28	18	—	100
計	158	87	227	3	475	189	112	129	5	435

全体=910

すようにデータは分類された。この基準により、本研究での社会人の上位チーム群は欠損となった。

攻撃性の測定尺度

1) 競技場面の攻撃性：佐藤ら(1991)¹¹⁾の作成したラグビーの競技場面における攻撃性質問紙を用いた(表2)。この質問紙は40の質問項目からなり、それぞれの質問項目について「まったくあたっていない」(1点)から「まったくあてはまる」(6点)までの6段階で評定するものである。

2) 日常場面における攻撃性：Kornadt(1982)⁸⁾のSaarbrücken Aggression Scale(日本語版；SAS質問紙)を用いた。この質問紙は52項目からなり、それぞれについての回答は、「まったくあたっていない」(1点)から「まったくあたっている」(6点)までの6段階評定尺度上に評定するものである。

3) 試合における怒りの経験：長谷川(1990)⁹⁾の作成した質問紙で、以下の質問項目からなる。①試合数：過去1カ月間に選手の出場した試合数(公式戦、練習試合を含めて)を回答する。②怒りの頻度：過去一カ月間に出場した試合中にどれほど怒りを感じた出来事が合ったかについて、「一度もない」(1点)から「1試合に10回以上」(7点)の7点尺度に評定する。③怒りの対象：怒りを感じた出来事において、どんな対象、すなわち、被験者の怒りを喚起した人物・事柄であることが多かったかを次の6項目により評定する。a. 対戦チームの選手、b. 味方チームの選手、c. 審判、d. 自分自身、e. 指導者、f. 観衆。それぞれの項目について、「あまり対象とならない」(0点)、「ときどき対象となる」(1点)、「よく対象となる」(2点)のどれかを選択する。

調査の実施

上記の1)、2)の質問紙は、先の調査と今回の調査で共通に実施したが、3)については今回の調査のみに実施した。先の調査では、実施順序の回答への影響を考慮して1)と2)の実施に1週間以上の間隔をおいた。しかし、今回の調査では1)、3)、2)と2)、1)、3)の順序の異なる2種類の冊子を作り、チーム毎で2つを同数ずつ配分しすることでカウンターバランスをとった。

調査の実施方法は各チームの代表者に依頼し、集会等で実施した。また調査は平成2年7月から8月の期間に実施した。

結 果

日常場面における攻撃性の因子

日常場面における攻撃性質問紙については、佐藤ら(1991)¹¹⁾がラグビーと剣道の選手のデータから主成分分析により5因子を抽出している。本研究ではラグビー選手910名の全データに対して同じ手法によって分析を行った。その結果、因子数を4としてバリマックス回転を施したとき、もっとも明解な因子構造が生じた(表2)。ここで得られた第1から第4の因子は順に佐藤らの因子I、因子II、因子IV、因子Vとほとんど同一の因子パターンを示していたので次のように解釈した。因子Iは「攻撃抑制」、因子IIは「自尊心に関わる攻撃」、因子IIIは「自己主張性」、因子IVは「怒りの表出」。

日常場面における攻撃性質問紙からは、以上の4つの因子が測定可能である。そこで、各因子のうちいずれかに.40以上の負荷でその他の因子には低い負荷を示した項目の得点を各因子毎に相加平均し、これをそれぞれの因子の得点とした。尺度の信頼度係数 α は、順に.80、.72、.64、.61であった。また尺度間の相関係数は、因子Iと因子IVの間に-.34があったほかはいずれも.20以下であった。

表2 日常の攻撃性質問紙 (Saarbrücken Aggression Scale) の因子構造

No.	質問項目	因子				h ²	
		I	II	III	IV		
24.	人の気持ちを傷つけないようにと、私は気をつけている。	.61				.39	
19.	私は何かまちがったことをすると、いつも良心の呵責に悩む。	.53				.34	
16.	もし誰かが私におかしな態度を示したり、親切でなかったりすると、私は自分の側にまちがいはなかったかと反省してみる。	.57				.33	
17.	人々はたいてい互いに傷つけ合いたくないと願っているが、しかしもし万一傷つけ合うような事があると、それを後悔する。	.56				.32	
7.	もし争いにまき込まれるようなことがあると、私はそのために苦しんだり悩んだりする。	.54				.32	
33.	もし誰かが私を傷つけた時には、その人が本当に私を傷つけようと思ったかどうか考えてみる。	.52				.30	
25.	私は自分の意見を言う前に、もし私がこう言ったら、他の人はどう思うだろうかと考えてみる。	.51				.28	
52.	いさかいの際には、私は折り合い、そして調停しようとする。	.51				.29	
31.	他の人が困っていると思うと、私はその人のために解決策をさがしてあげる。	.50		.35		.38	
23.	自分が正しいと思っても、状況によっては相手にゆずることが出来なくてはいけ ない。	.46				.22	
3.	誰かが私を傷つけた時には、何故傷つけたかというその理由を知る事が私には大切だ。	.43				.19	
40.	正しい理由があっても、怒りを表現したあとは、何か悪いようなことをしたよう な気持ちになる。	.43				.26	
32.	悪には善で対処すべきだと思うから、私は実際でもそうする。	.42				.36	
35.	私はよく他の人たちが不当な待遇を受けていると思う。	.62				.42	
50.	うしろで誰かの笑い声が聞こえると、その人は私をバカにして笑っているのでは ないかと感じる。	.55				.33	
22.	他の人たちは、私を怒らせるためにわざと私に反対しているのだという事を、私 はちゃんと知っている。	.55		-.31		.42	
51.	ほとんど毎日のように私は、人々が自分達の目的を果たすために、他の人を無視 しているのを見る。	.54				.31	
34.	人々には用心と不信の念をもって近づくと良い。	.54				.35	
45.	私には腹の立つことがたくさんある。	.50		.34		.37	
26.	ある人々は人のじゃまをし、人を妨害するのを楽しみにしている。	.45				.21	
36.	もし誰かが運悪く失敗すると、どこかに必ずそれを喜ぶ人がいる。	.44				.24	
29.	誰かが自分の意見をとおそうとしているのを見ると、私はたまらなく反対したく なる。	.43				.22	
41.	もし誰かが私に不当なことをした時には、私はそれ以後はその人を避ける。	.40				.20	
44.	私が一度こうしようと決心したら、人がいくら何と言おうとそうたやすく決心は 変わらない。			.61		.39	
46.	私は人の言いなりにならないし、人に利用されたりはしない。			.57		.35	
15.	他の人がどう思おうと、私は自分が正しいと信じたことをする。			.56		.34	
27.	私は人から言われてなくも、自分のすることくらい自分で決める。			.56		.36	
20.	争いは友情につきものだ。			.43		.21	
30.	障害はそれに向かっていき、それと戦うためにあふる。			.42		.21	
13.	時折、私の腹は煮えくり返る。				.56	.41	
39.	もし何かが私の思うようにならないと、私はすぐ腹を立てる。				.50	.37	
14.	けんかになるよりも、私は他の人の言うことをおとなしく聞く方が好きだ。	.37			-.47	.43	
42.	私はたやすく自分の意見や願望を抑えることが出来る。				-.47	.25	
2.	もし両親や友達から批判をされると、私はその批判を快く受けつける。				-.44	.26	
6.	どんなことがあっても争いだけは避けるべきだ。	.36			-.44	.33	
		寄与率	9.0	7.6	5.8	5.0	27.3

因子負荷が.40以上を示した項目のみ記した。また因子負荷の.30以下は省略した。

表3 ラグビー選手の競技場面における攻撃性質問紙の因子構造

No	質 問 項 目	因子	I	II	III	IV	V	VI	VII	h ²
5.	興奮して相手といがみ合っても、私はすぐ冷静さを取り戻す。		.66							.46
35.	相手が不正なプレイをしてきたら、私はすぐにかつとなって、手が出そうになる。		-.64							.56
31.	試合中、たとえ自分の方が正しいと思っても、相手とやり合うようなことはしない。		.64							.47
7.	試合中、私は相手とのトラブルはどんなことがあっても避けるようにしている。		.58							.48
23.	試合中、けんかになるよりも私は他人の言うことをおとなしく聞く。		.57		.35					.46
39.	試合中、相手に下手なことを言って、怒らせるようなことはしない。		.46							.28
27.	笛が鳴って即座に、私に対するプレイをやめない選手に、私はどなりつけ払いのけたりする。		-.41							.39
15.	腹が立ってもそれを抑えることのできないような選手は、スポーツマンとして適格でない。		.40						.30	.30
40.	相手の選手に強烈なタックルやあたりをくらうと、それ以後その選手をなるべく避けたい。			.73						.59
16.	私は相手からの強烈なタックルを受けるのが恐ろしい。			.70						.56
24.	私は自分より大きくて強そうな相手の選手が突進してくると、つい弱気になってしまう。			.68						.58
32.	私は空中に上がったボールをキャッチするとき、相手の強烈なタックルが気になってしりごみしてしまうときがある。			.65						.44
8.	私は相手が大きくて強そうなときほど、その相手真っ向から勝負したくなる。			-.54		.42				.52
22.	相手の選手が私に腹を立てていたら、私は自分の側に間違いはなかったか反省してみる。				.64					.47
29.	試合中、私は相手選手に汚い反則を犯した時、非常に悪いことをしたと思う。				.62			.30		.50
14.	味方の選手だけでなく、相手の選手が倒れていると心配で仕方がない。				.60					.41
38.	試合中、できるだけ私は相手に必要以上のダメージを与えないようにしている。				.46					.47
30.	勝つためとはいえ、相手をひどく怪我させるプレイをすべきではない。				.46			-.37	.31	.48
6.	選手達は、たいていお互いに傷つけないと願っている。				.40					.26
33.	私の強烈なコンタクト・プレイは、味方の選手も恐れるほどである。					.75				.65
1.	まわりの人は私に、荒っぽいプレイを期待している。					.68				.54
25.	私は激しい当たりやタックルをして、相手選手を脅かす。					.67				.61
17.	私は普段はおとなしいが、競技場では人が変わったように激しいプレイをする。					.46				.35
9.	私は、試合中の自分を向こう見ずな男だと思う。					.45				.42
19.	味方の選手が相手の選手のプレイで、こっぴどくやられるのを見ると、私はその選手のか	-.32					.58			.49
11.	私は相手にやられたら、それ以上にやり返さないと気が済まない。	-.32					.56			.54
26.	相手を尊重し過ぎると試合には勝てない。						.56			.36
2.	争いはラグビーには付きものである。						.54			.46
3.	試合中、私は憎らしい相手選手を打ちのめしたくなる。	-.32					.48			.48
34.	試合中、相手の選手に対して、情けなど無用である。				-.40		.45			.47
36.	相手がボールを受け取る少し前と判っていても、ときどき私は激しいタックルを仕掛ける。						.65			.50
12.	空中に上がっているボールを取ろうとする相手選手に対して、私は強烈なタックルを狙う。						.65			.49
20.	ボールを持ったままで、身動きのできない状態にいる相手選手に、私はこぞとばかりに猛烈なタックルを仕掛ける。						.33	.54		.43
4.	私は相手がボールをプレイした直後でも、わざと激しいタックルを仕掛ける時がある。						.50			.47
28.	相手選手が怪我をしていたら、私はその箇所を狙う。						.47			.45
18.	レフリーが反則を取らなければ、どんなプレイをしても良い。								-.65	.56
21.	私は相手のプレイがどうであろうと、公正なプレイによって戦うことが大切だと思う。								.62	.52
37.	相手に怪我させることを意図する選手に対して、厳しく反則を取るべきである。								.61	.50
10.	不正なプレイでもときとして勝つために、それは必要なことである。						.43		-.51	.49
13.	私のプレイに対するコーチやチームメイトからの批判を、私は快く受け入れる。		-.31	.33						.41

寄与率 8.0 7.2 6.9 6.7 6.5 6.3 5.5 47.1

因子負荷の.30以下は省略した。

競技場面における攻撃性の因子

佐藤ら(1991)¹¹⁾の研究では、チームの競技水準が上位である高校・大学のラグビー選手366名のデータから、主成分分析により7因子を抽出した。

先行データと今回の調査データを併せた910名のデータに対して同じ手法によって分析を実施した。その結果、因子数を7としてバリマックス回転を施したとき、もっとも明解な因子構造が得られた(表3)。ここで得られた因子は、因子の抽出順位

で多少異なっていたが、佐藤らの因子とほとんど同一の因子パターンを示していた。

因子 I は佐藤らの怒りに伴う報復行動(因子 I)にほぼ相当していた。もともとこの因子は両極性の因子パターンを示していたが、先の結果に比べて抑制の方向性をより強く反映させていたので、本研究では「怒り報復の抑制」と呼ぶことにした。因子 II は佐藤らの接触プレイに対する恐怖(因子 III)と完全に一致し、ここでは「接触プレイの恐怖」と呼ぶことにした。因子 III は佐藤らの相手の危害への配慮(因子 V)の 4 項目に加えて、類似した内容の 2 項目に高い負荷を示した。そこで「相手の危害への配慮」と呼ぶこととした。因子 IV は、佐藤らの攻撃的なプレイスタイル(因子 II)と一致し、ここでは「攻撃的な自己認知」と呼ぶことにした。つづく因子 V には、相手にやられたら倍にして仕返しをする、勝負事には情けは無用などの内容が含まれていた。そこでこの因子を「攻撃応酬の規範」と命名した。この因子は佐藤らの研究では因子パターンが不明瞭で解釈不能とした第 VII 因子であると考えられる。つづいて因子 VI は佐藤らの「意図的な不当プレイ」(因子 VI)と一致していた。最後に因子 VII は佐藤らのルール違反行動の許容(因子 IV)の 4 項目に高い負荷を示していた。本研究では攻撃抑制の側面を強調して、「ルール厳守の規範」と呼ぶことにした。

ラグビー選手の競技場面における攻撃性質問紙は、以上の 7 因子から構成されていると考えられる。そこで、各因子のうちいずれかに .40 以上の負荷でその他の因子には低い負荷を示した項目の得点を各因子毎に相加平均し、これをそれぞれの因子の得点とした。尺度の信頼度係数 α は、順に .74, .77, .69, .72, .71, .69, .64 であった。表 4 には尺度間の相互の相関係数を示す。因子の内容や

尺度間の関連パターンから、「怒り報復の抑制」、「接触プレイの恐怖」、「相手の危害への配慮」、及び「ルール厳守の規範」は、競技中の攻撃行動を抑制する機能を有する抑制成分、一方、「攻撃的な自己認知」、「攻撃応酬の規範」、及び「意図的な不当プレイ」は、そうした行動を促進する動機成分であると想定することができる。

ここで佐藤ら¹¹⁾と同様に本研究でも日常場面と競技場面の攻撃性尺度間の関連性を重回帰分析によって検討した。表 5 に示した結果からわかるように、競技場面での「怒りの報復の抑制」に関しては、日常の「怒りの表出」との間に $\beta = -.48$ を示し、その全分散の 24% が日常の攻撃性により説明された。先の研究結果と一致して怒りに関わる攻撃は両場面でよく対応していた。¹⁸⁾ 一方、手段性の高い攻撃と考えられる「意図的な不当プレイ」は日常の攻撃性により全分散のわずか 6% しか説明されず、日常の攻撃性と関連性の低いことが繰り返して示された。「ルール厳守の規範」と「相手の危害への配慮」は日常場面での「攻撃抑制」(それぞれ $\beta = .27, \beta = .25$) と、「攻撃応酬の規範」は「怒りの表出」($\beta = .25$) と正の関連性を示した。またこれらの尺度とやや異なった関連パターンを示したのは「攻撃的な自己認知」と「接触プレイの恐怖」で、前者は日常場面での「自己主張性」($\beta = .29$) と正の関連性がみられた。反対に後者はそれとは負の関連性 ($\beta = -.26$) を示し、「自尊心に関わる攻撃」($\beta = .22$) と正の関連性を示した。競技中での強い恐怖心は、日頃において自尊感情の損害意識をもち、また外側には自己顕示できない者のうちに生じるようである。

発達年齢とチーム及び個人競技水準の効果

図 1 には日常場面における攻撃性尺度、また図

表 4 競技場面における攻撃性尺度間の関連性

	I	II	III	IV	V	VI
I 怒り報復の抑制	—					
II 接触プレイの恐怖	.14	—				
III 相手の危害への配慮	.44	.28	—			
IV 攻撃的な自己認知	-.19	-.39	-.07	—		
V 攻撃応酬の規範	-.47	-.15	-.38	.35	—	
VI 意図的な不当プレイ	-.35	-.19	-.34	.41	.52	—
VII ルール厳守の規範	.35	-.00	.35	-.19	-.39	-.40

N = 910 ; .20 以上の相関係数は太字ゴシック体で記した。

表5 重回帰分析の結果

競技場面における攻撃性	日常の攻撃性				R	R ²
	I	II	III	IV		
I 怒り報復の抑制	.09**	.00	-.06**	-.48**	.49**	.24
II 接触プレイの恐怖	.03	.22**	-.26**	-.02	.37**	.11
III 相手の危害への配慮	.25**	.10**	-.11**	-.18**	.37**	.13
IV 攻撃的な自己認知	.09**	.14**	.29**	.06	.29**	.08
V 攻撃応酬の規範	.04	.12**	.19**	.25**	.37**	.13
VI 意図的な不当プレイ	-.01	.13**	.18**	.08**	.26**	.06
VII ルール厳守の規範	.27**	-.17**	.02	-.06	.35**	.12

N=910；日常での攻撃性尺度，I：攻撃抑制，II：自尊心に関わる攻撃，III：自己中心性，IV：怒りの表出。

.20以上の標準偏相関係数は太字ゴシック体で記した。

***p*<.01, **p*<.05

2には競技場面における攻撃性尺度について，発達年齢（高校・大学）×チームの競技水準（上位・下位）×個人の競技水準（レギュラー・準レギュラー・非レギュラー）の各群，及び社会人の平均得点を示す。

チーム競技レベルの上位群の欠損している社会人を除いて，高校・大学のデータに対して，各尺度毎に発達（高校・大学）×チーム競技水準（上位・下位）×個人の競技水準（レギュラー・準レギュラー・非レギュラー）の3要因分散分析を行った。また日常場面での攻撃性尺度において各群間に有意な差が認められたので，競技場面における攻撃性尺度については，3要因分散分析と同時に，日常場面での4つの攻撃性得点を共変量とする，3要因共分散分析を行った。日常場面における攻撃性尺度に関しては表6に，また競技場面における攻撃性尺度に関しては表7にその結果の要約を示す。

まず日常場面での攻撃性尺度についてみる（図1，表6）。「攻撃抑制」に関しては発達年齢と個人の競技水準の主効果が有意であった。大学選手（M=4.21）は高校選手（M=4.02）に比べて高い値を示し，またレギュラー選手（M=4.15）はそれ以下の水準の選手（M=4.08）に比べてわずかに高かった。

「自尊心に関わる攻撃」に関しては発達年齢と個人の競技水準の主効果が，またチームの競技水準と個人の競技水準の交互作用が認められた。しかしその内容は「攻撃抑制」とは反対で，大学選手（M=3.08）は高校選手（M=3.41）に比べてこの得点が低かった。下位チーム群では非レギ

ュラー群（M=3.43），準レギュラー群（M=3.32），レギュラー群（M=3.12）の順に低かったが，上位チーム群では水準間に差がみられなかった。

「自己主張性」に関してはいずれの主効果も有意であった。上位チーム群（M=4.17）が下位チーム群（M=4.02）よりも，またレギュラー群（M=4.13），準レギュラー（M=4.11），非レギュラー群（M=4.09）の順に，さらに大学選手（M=4.17）が高校選手（M=4.06）よりもこの傾向が強かった。

最後に「怒りの表出」に関してはいずれにも有意な主効果は認められなかった。

以上の結果を要因毎に効果の大きいものの順に整理してみると，大学選手は高校選手に比べて，自尊心の損害感情が低く，日常では攻撃抑制的であり，自己主張の強い傾向がある。また上位チームに属する選手は下位チームの選手より，自己主張の強い傾向がある。さらに個人の技能水準が上がるほど，自己主張傾向は強く，逆に自尊心の傷害感は低い傾向がある，ということが示された。

つぎに競技場面における攻撃性尺度についてみる（図2，表7）。これらの尺度については分散分析と日常場面での攻撃性の効果を除外した共分散分析を実施したが，2つの分析結果における各要因の効果の変化に着目しながら特に共分散分析の結果を検討してみた。

「怒り報復の抑制」に関しては，分散分析ではチームの競技水準の主効果と，発達年齢×チームの競技水準の交互作用が有意であったが，この交互作用は共分散分析では有意ではなくなり，別に個人の競技水準の主効果が有意となった。この効

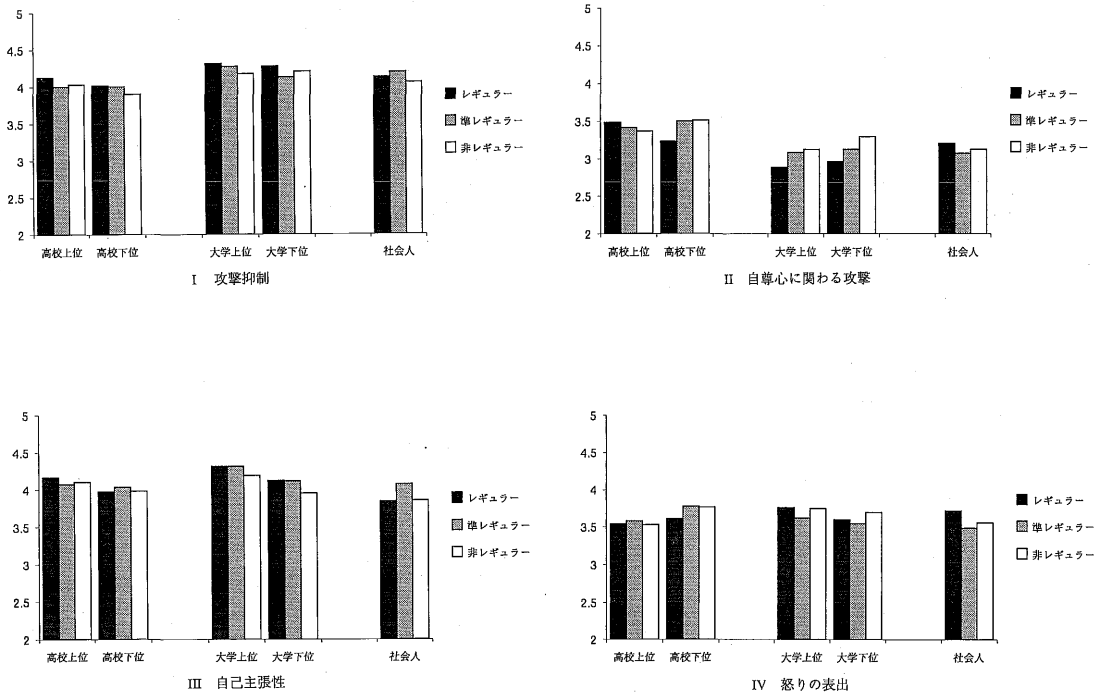


図1 各群の日常場面における攻撃性尺度得点

表6 日常場面における攻撃性尺度についての分散分析の結果

日常における攻撃性	要因	df	F値	
I 攻撃抑制	高校・大学差	1/790	28.75**	大学>高校
	チーム競技水準	1/790	3.58	
	個人競技水準	2/790	3.34*	正>準=非
II 自尊心に関わる攻撃	高校・大学差	1/790	71.42**	高校>大学
	チーム競技水準	1/790	< 1	
	個人競技水準	2/790	4.51*	非>準>正
	②×③	2/790	4.02*	下位で③の効果大
III 自己主張性	高校・大学差	1/790	5.21**	大学>高校
	チーム競技水準	1/790	12.98**	上位>下位
	個人競技水準	1/354	7.02**	正>準>非
IV 怒りの表出	高校・大学差	1/790	1.70	
	チーム競技水準	1/790	1.15	
	個人競技水準	2/790	1.15	

交互作用については有意な効果の認められたもののみを記した。
 表中の①は高校・大学の発達要因, ②はチームの競技水準要因, ③は個人の競技水準要因を示す。
 ** $p < .01$, * $p < .05$

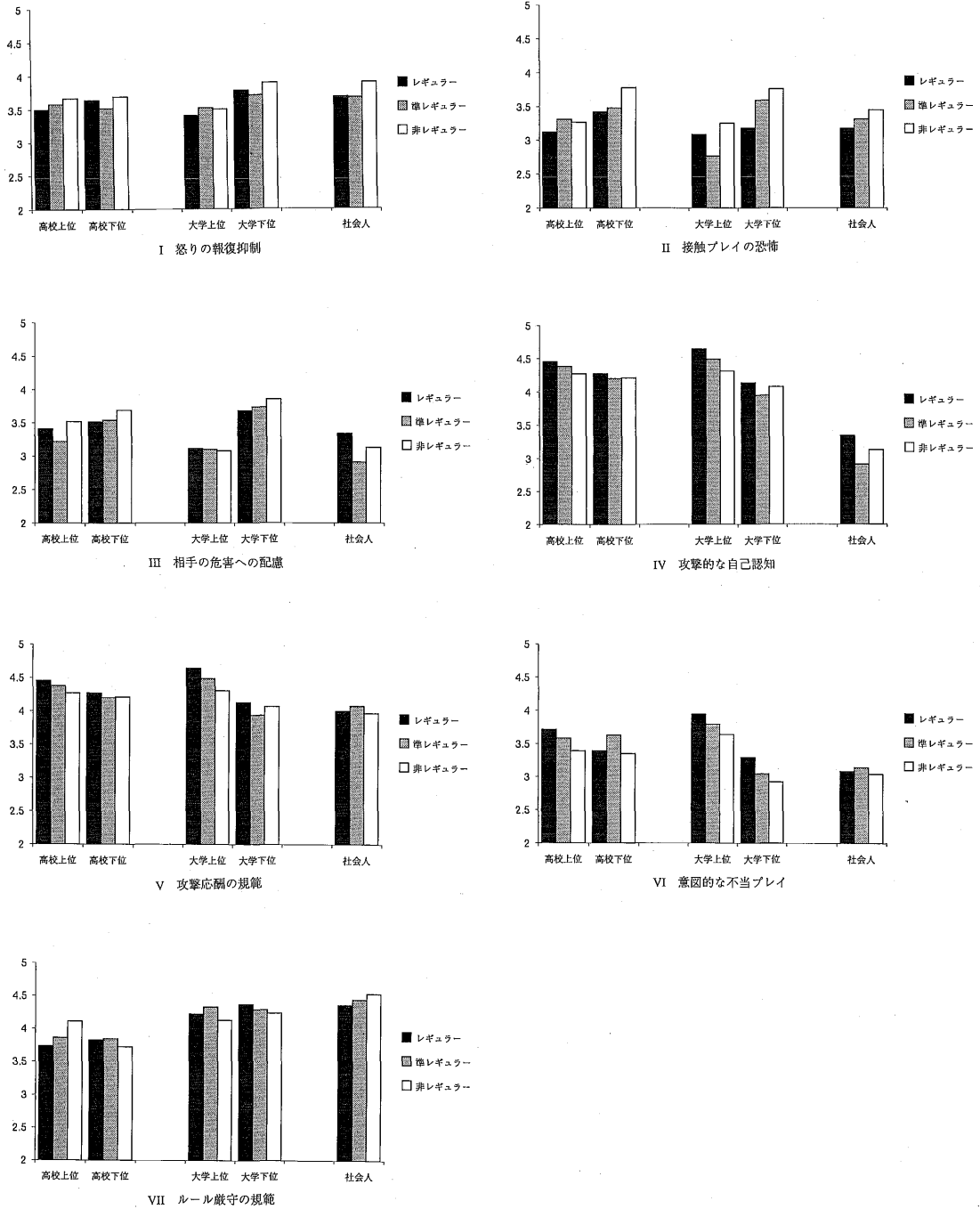


図2 各群の競技場面における攻撃性尺度得点

表7 競技場面における攻撃性についての分散分析および共分散分析の結果

競技場面における攻撃性	要因	分散分析の結果		共分散分析の結果		
		df	F値	df	F値	
I 怒り報復の抑制	高校・大学差	1/790	< 1	1/786	< 1	
	チーム競技水準	1/790	12.62**	1/786	19.89**	下位>上位
	個人競技水準	2/790	1.68	2/786	4.34*	非>準>正
	①×②	1/790	7.74**			大学で②の効果大
II 接触プレイの恐怖	高校・大学差	1/790	8.92**	1/786	< 1	高校>大学
	チーム競技水準	1/790	40.95**	1/786	33.63**	下位>上位
	個人競技水準	2/790	11.98**	2/786	9.02**	非>準>正
	①×③	2/790	3.34*			大学で③の効果大
III 相手の危害への配慮	高校・大学差	1/790	7.82**	1/786	9.97**	高校>大学
	チーム競技水準	1/790	66.55**	1/786	87.28**	下位>上位
	個人競技水準	2/790	1.12	2/786	2.37	
	①×②	1/790	23.89**	1/786	18.60**	大学で②の効果大
IV 攻撃的なプレイ認知	高校・大学差	1/790	3.66	1/786	4.28*	高校>大学
	チーム競技水準	1/790	10.49**	1/786	6.44*	上位>下位
	個人競技水準	2/790	17.38**	2/786	18.27**	正>準>非
	①×③	2/790	4.19*	2/786	4.54*	大学で③の効果大
V 攻撃応酬の規範	高校・大学差	1/790	< 1	1/786	< 1	
	チーム競技水準	1/790	24.57**	1/786	22.91**	上位>下位
	個人競技水準	2/790	3.88*	2/786	5.08**	正>準>非
	①×②	1/790	7.55**	1/786	5.09*	大学で②の効果大
VI 意図的な不当プレイ	高校・大学差	1/790	< 1	1/786	< 1	
	チーム競技水準	1/790	47.04**	1/786	43.04**	上位>下位
	個人競技水準	2/790	5.90**	2/786	7.12**	正>準>非
	①×②	1/790	26.07**	1/786	25.84**	大学で②の効果大
VII ルール厳守の規範	高校・大学差	1/790	41.83**	1/786	17.36**	大学>高校
	チーム競技水準	1/790	< 1	1/786	< 1	
	個人競技水準	2/790	< 1	1/786	1.76	

交互作用については有意な効果が認められたもののみを記した。

表中の①は高校・大学の発達要因, ②はチームの競技水準要因, ③は個人の競技水準要因を示す。

** $p < .01$, * $p < .05$

果の変化はこの抑制尺度が日常での「攻撃抑制」と関連していたことが考えられる。効果の内容をみると上位チーム群 ($M=3.53$) は下位チーム群 ($M=3.69$) より衝動的な傾向を示したが, その差は特に大学で大きかった。上位チーム群では大学 ($M=3.48$) が高校 ($M=3.58$) よりも衝動的で, 反対に下位チーム群では大学 ($M=3.78$) が高校 ($M=3.63$) よりも抑制的である傾向がみられた。また日常場面では抑制の強い傾向を示していたレギュラー群は, 競技場面においては逆に準レギュラー群や非レギュラー群に比べて衝動的な

傾向を示していた(順に $M=3.56$, $M=3.59$, $M=3.63$)。

「接触プレイの恐怖」に関しては, 分散分析ではいずれの要因の主効果も有意であったが, 共分散分析では有意となったのはチームの競技水準と個人の競技水準の2つの主効果であった。下位チーム群 ($M=3.53$) ほど上位チーム群 ($M=3.17$) より恐怖心を抱きやすく, また技能水準が低くなるほど順にレギュラー群 ($M=3.18$), 準レギュラー群 ($M=3.33$), 非レギュラー群 ($M=3.43$) と恐怖心は強くなる傾向を示した。要因の効果の低

下は恐怖心が日常での「自尊心に関わる攻撃」に関連していたためであると考えられる。

「相手の危害への配慮」に関してはチームの競技水準と発達年齢の主効果、さらに両者の交互作用が、分散及び、共分散分析をとおして有意であった。大学選手(M=3.34)は高校選手(M=3.49)に比べてこの認知的な配慮が低かった。また発達年齢の効果以上に上位チーム群(M=3.26)と下位チーム群(M=3.65)の差は大きく、特にそれは大学で顕著であった。そのため、上位群では大学(M=3.09)が高校(M=3.41)よりも低く、一方、下位群では大学(M=3.75)が高校(M=3.58)よりも高かった。

これら3つの抑制的因子に対するチームの競技水準の効果の内容は、上位チーム群が、下位チーム群に比べて抑制が低く、またこれに関する交互作用はその差が高校においてよりも大学において大きくなるというものであった。さらに個人の競技水準の効果はレギュラーであるほど抑制が低下するというものであった。

つづく「攻撃的な自己認知」に関してはいずれの主効果も有意であった。また発達年齢×個人の競技水準の交互作用についても有意であった。効果のもっとも大きかった個人の競技水準からみていくと、レギュラー群、準レギュラー群、非レギュラー群の順に自己を攻撃的なプレイヤーと認知している傾向があった(順に M=3.41, M=3.25, M=3.08)。また上位チーム群(M=3.29)は下位チーム群(M=3.16)よりも高かった。加えてこの認知は高校選手が大学選手よりも強い傾向をみせた。交互作用については高校では非レギュラー(M=3.14)とそれ以上の水準間(順に M=3.37, M=3.39)に差が見られたのに対して、大学ではレギュラー(M=3.46)とそれ以下の水準間(順に M=3.08, M=3.02)に差が見られるというものであった。

「攻撃応酬の規範」に関してはチームの競技水準と個人の競技水準の主効果と、発達年齢×チームの競技水準の交互作用が2つの分析をとおして有意であった。上位チーム群(M=4.39)は下位チーム群(M=4.16)よりも強い攻撃規範をもっていた。この差は特に大学で顕著で、上位群では大学(M=4.41)と高校(M=4.37)の規範得点がほぼ等しかったのに対して、下位群では大学(M=4.05)が高校(M=4.24)よりも低かった。また

レギュラー群(M=4.38)がそれ以下の水準(ともに M=4.25)より強い攻撃規範をもっていた。

つづく「意図的な不当プレイ」に関する有意な主効果と交互作用はともにその内容では「攻撃応酬の規範」の結果と同じであったが、その効果はより大きなものであった。手段性の強いこの攻撃は上位チーム群(M=3.64)が下位チーム群(M=3.30)より多く実行していた。この差は大学で特にきわだっており、上位群では大学(M=3.73)が高校(M=3.57)に比べて実行が多かったのに対して、逆に下位群では大学(M=3.11)が高校(M=3.43)に比べて減少していた。また個人の競技水準が上がるほどこの攻撃の実行経験は多くなるようであった(順に M=3.58, M=3.51, M=3.43)。

ここまでの3つの攻撃促進の因子に対する競技水準の効果の内容は、チームの競技水準、また個人の競技水準が上がるほど、いずれの攻撃促進の動機も強くなる。そして、交互作用についてはそれらの傾向は高校よりも大学において顕著になるというものであった。

最後に「ルール厳守の規範」に関して有意な効果は、発達年齢の主効果のみであった。ルール尊重の精神・思想を反映するこの規範は、大学選手(M=4.23)が高校選手(M=3.85)よりも強かった。

怒りの経験との関連性

試合における怒りの経験に関する質問紙は今回の調査対象の544名に実施した。回答の信頼性を高めるために、過去1カ月間に試合の出場経験の無かった者の回答は分析から除外することとした。また怒りの頻度と怒りの対象の各尺度で欠損値の数が多少異なったので、有効データ数は366-387であった。ここではこれらの怒りの経験尺度と日常場面及び競技場面での攻撃性尺度の関連性を検討することで、尺度の基準関連妥当性を確かめた。

表8は怒りの経験尺度と攻撃性の各尺度間の相関係数を示している。日常場面での攻撃性尺度に関して.20以上の相関係数がみられたのは、怒りの対象尺度の「相手選手」と日常での「怒りの表出」だけであったのに対して、競技場面での攻撃性尺度についてはより多くの怒りの尺度との関連性が示された。またその関連性のパターンをみると、攻撃動機の成分を示すと想定した「攻撃的な自己

表 8 怒りの経験尺度との関連性

	怒りの対象						
	怒り頻度	相手選手	味方選手	審判	自分自身	指導者	観衆
日常場面での攻撃性							
I 攻撃抑制	-.06	.05	-.02	-.04	.17**	-.10*	-.03
II 自尊心に関わる攻撃	.15**	.08*	.12**	.14**	.00	.12*	.07
III 自己主張性	.05	.08	.04	.03	.12*	.04	-.03
IV 怒りの表出	.13**	.23**	.15**	.07	.05	.06	.07
競技場面での攻撃性							
I 怒り報復の抑制	-.33**	-.34**	-.07	-.18**	-.04	-.13**	-.13**
II 接触プレイの恐怖	-.08	-.13**	.05	-.07	-.08	.03	.03
III 相手の危害への配慮	-.18**	-.17**	-.13**	-.24**	.04	-.06	-.05
IV 攻撃的な自己認知	.23**	.15**	.15**	.11*	.02	.12**	.07
V 攻撃応酬の規範	.34**	.32**	.09*	.21**	.02	-.03	.05
VI 意図的な不当プレイ	.24**	.11*	.04	.22**	-.04	.10*	.12*
VII ルール厳守の規範	-.22*	-.10*	-.06	-.20**	.10*	-.21**	-.10*

N=366-387; .20以上の相関係数は太字ゴシック体で記した。

認知, 「攻撃応酬の規範」, 「意図的な不当プレイ」は怒りの尺度と正の相関係数と, 反対に攻撃抑制の成分と考えられた「怒り報復の抑制」, 「接触プレイの恐怖」, 「相手の危害への配慮」, 「ルール厳守の規範」は負の相関係数を示した。これらのことから, 実際の試合場面において選手が実行する怒りに関わる攻撃については, 競技場面での攻撃性尺度の方が日常場面での攻撃性尺度よりも予測力が高いこと, また競技場面における攻撃性が選手の攻撃行動に対して促進あるいは抑制の機能を働かせることが示された。

考 察

本研究では競技場面における攻撃性の発達に競技水準の高低がどのような影響を及ぼすかを検討した。そこでまず最初に, 佐藤ら¹¹⁾の先行研究で得られた攻撃性の因子の再現性が検討された。競技力が低いチームに所属する選手や, 19-38歳の社会人のクラブチームに所属する選手のデータを含めても, 先行研究で得られたラグビー選手の競技場面における攻撃性の7因子とほとんど同一の因子が確認された。因子の尺度間の相関パターンや日常の攻撃性の尺度との重回帰分析の結果からも因子の同一性を示す証拠が得られたと考える。また, 本研究では長谷川⁵⁾の怒りの経験尺度との関連性から尺度の妥当性が保証された。その結果はこれらの競技場面における攻撃性が実際の怒りに関連す

る攻撃に対して日常場面での攻撃性尺度よりも予測力の優れていること, また攻撃動機の成分の尺度は促進機能を, 攻撃抑制の成分の尺度は抑制機能が働くことが示された。

攻撃性の発達に影響する要因として本研究でとりあげた要因は, 高校・大学の発達年齢, チームの実績, 及び個人の技能水準で, いずれも違った角度からの競技水準の差を反映する要因であった。発達年齢には体格や競技年数の差が, またチームの競技水準には集団の規範・目標の違いが, さらに個人の技能水準には競技年数, 学年差(特に高校において)などがそれぞれ含まれている。競技場面における攻撃性に関する分散分析及び共分散分析の結果からは, 攻撃抑制の成分である「相手の危害への配慮」, 「怒り報復の抑制」及び「接触プレイの恐怖」に共通して, 上位チームに属する選手は下位チームに属する選手に比べて抑制が低下しており, また前者の2つの抑制についてはその差が高校においてよりも大学において顕著に大きくなっていった。さらに後者の2つの抑制については個人の競技水準が上がるほど抑制が低下していた。また攻撃動機の成分である「攻撃応酬の規範」, 「意図的な不当プレイ」及び「攻撃的な自己認知」については, 抑制成分とは反対に上位チームに属する選手が下位チームに属する選手に比べて攻撃性を強化させており, また前者の2つの攻撃性についてはその差が高校においてよりも大学

において顕著に大きくなっていった。さらに個人の競技水準が上がるほどいずれの攻撃性も強化させていた。

上述の6つの攻撃性尺度についての結果を全体としてみると、第1に、いずれの尺度にも一貫してチームの競技水準の効果が認められた。チャンピオンシップを目標とする集団においては、選手を攻撃的傾向にする規範が強く存在し、このために攻撃性の発達を促進されたのかもしれない。また反対に競争性をあまりに強調しない集団においては選手の攻撃的傾向を低下させるような規範や社会化が強く働いているのかもしれない^{16,17)}。第2に、しかしながら上位・下位どちらのチームであったとしても個人の競技水準が上がるほど、つまりレギュラーとして試合経験を積むほど攻撃動機の成分を強め、反対に抑制の成分を弱めるようである。

以上から本研究での結果は、攻撃動機の体系が個人の置かれた状況的条件との相互作用において形成される、という攻撃動機の発達と個人差に関する Kornadt^{9,10)}の仮定を支持するものと考えられる。

ところで、競技場面での攻撃抑制である「ルール厳守の規範」については、他の攻撃抑制の成分とは発達の方向性が反対で、大学選手が高校選手よりもこの規範を強くもっていた。怒りの経験尺度を外の変数とする関連性の検討からは、確かにこの尺度は怒りの頻度や、審判や指導者に対する怒りを抑制する働きを示していた。高校から大学へと加齢に伴う社会性の発達が強く影響しているのかもしれない。または競技水準が上昇するにつれて選手は攻撃的なプレイや行動を加害者として多く実行するだけでなく、同時にそうしたプレイや行動の被害者となる可能性が増大する。そのためスポーツ競技の公正性を保ち、選手相互の安全性を保証してくれるルールの重要性は低下することはない、むしろ強く意識されるのではないだろうか。また別の解釈としては、競技水準が上昇するにつれて優秀な審判による裁定や多くの観衆にさらされての試合となり、ルールに基づく公正性が厳格に意識されるようになるのかもしれない。

この抑制尺度を含めその他の攻撃性が、実際の選手の攻撃行動にどう影響するかについては、本研究で用いた怒りの経験尺度だけでなく、選手の試合中における様々な行動について検討してみる

必要であろう。例えば、試合中での相手の怪我に対する反応、危険な反則を犯したときの反応、試合後の挨拶や会話における反応など。また本研究では社会人選手の競技力の上位チームに関するデータが欠損していた。この対象からのデータを収集することで、本研究で得られた結果をさらに確かめていく必要がある。

要 約

本研究では、ラグビー選手の攻撃性に対する競技水準との関連性を検討した。高校487名、大学363名、社会人クラブ137名のラグビー選手を対象として、ラグビー選手の競技場面における攻撃性測定質問紙(佐藤ら, 1991)を実施した。この質問紙は主成分分析によって抽出された以下の7つの因子による攻撃性の2つの構成要素、すなわち攻撃抑制と攻撃動機からなっていた。前者は(a)怒りの報復の抑制、(b)相手の危害への配慮、(c)接触プレイの恐怖、(d)ルール厳守の規範、また後者は(e)攻撃的な自己認知(f)攻撃応酬の規範(g)意図的な不当プレイ。これらの下位因子毎に高校・大学、上位チーム・下位チーム、及びレギュラー・準レギュラー・非レギュラーの群間を比較するため分散分析ならびに日常の攻撃性を共変量とする共分散分析を実施した。主な結果は次のとおりであった。(1)上位チームの選手は、下位チームの選手に比べて、(a, b, c)の攻撃抑制が低下し、(e, f, g)攻撃動機がよく発達していた。(2)また個人の技能水準が上がるほど、(e, f, g)の攻撃動機が強くなり、(a, b)の攻撃抑制が低下した。(3)(d)ルール厳守の規範の攻撃抑制に関しては、大学選手が高校選手よりも厳格に認識していた。

引用・参考文献

- 1) Bredemeier BJ (1983) : Athletic aggression : A moral concern. (Ed.) Goldstein JH (In) Sports Violence. Springer-Verlag, New York, pp. 47-81
- 2) Bredemeier BJ (1985a) : Moral reasoning and the perceived legitimacy of intentionally injurious sport acts. Journal of Sport Psychology 7 : 110-124.
- 3) Bredemeier BJ (1985b) : Values and violence in sports today. Psychology Today, October : 23-32.
- 4) 長谷川悦示(1987) : ラグビー選手の攻撃行動に関

- する研究：攻撃動機と攻撃抑制を視点として。筑波大学体育研究科修士論文。
- 5) 長谷川悦示(1990)：ラグビー競技での攻撃行動に及ぼす怒りと認知の効果。筑波大学体育科学研究科修士論文。
 - 6) 長谷川悦示, 佐藤成明(1991)：ラグビー選手の競技場面における攻撃性：スポーツ選手の攻撃行動に関する研究(1), 日本体育学会第42回大会号。
 - 7) 市丸祐一, 長谷川悦示, 佐藤成明(1991)：剣道選手の競技場面における攻撃性：スポーツ選手の攻撃行動に関する研究(2), 日本体育学会第42回大会号。
 - 8) Kornadt HJ (1982) : Aggressionsmotiv und Aggressionshemmung. Hans Hunber, Bern.
 - 9) Kornadt HJ (1984a) : Motivation theory of aggression and its relation to social psychological approaches. (Ed.) Mummendey A (In) Social Psychology of Aggression. Springer-Verlag, Berlin Heideberg, pp.21-31.
 - 10) Kornadt HJ (1984b) : Development of aggressiveness : A motivation perspective. (Eds.) Kaplan M (In) Aggression in Children and Youth. Martinus Nijhoff Publishers, Hague, pp.73-87.
 - 11) 佐藤成明, 長谷川悦示, 市村操一(1991)：ラグビーおよび剣道選手の競技場面における攻撃性, 筑波大学体育科学系紀要 14 : 65-77.
 - 12) Russell GW (1983) : Psychological issues in sports aggression. (Ed.) Goldstein JH (In) Sports Violence. Springer-Verlag, New York, pp.157-181.
 - 13) Ryan MK, Williams JM and Wimer B (1990) : Athletic aggression : Perceived legitimacy and behavioral intentions girls' high school basketball. Journal of Sport & Exercise Psychology 12 : 48-55.
 - 14) Silva JM (1981) : Normative compliance and rule violating behavior in sport. International Journal of Sport Psychology 12 : 10-18.
 - 15) Silva JM (1983) : The perceived legitimacy of rule violating behavior in sport. Journal of Sport Psychology 5: 438-448.
 - 16) Silva JM (1984) : Factors related to the acquisition and exhibition of aggressive sport behavior. (Ed.) Silva JM (In) Psychological Foundation of Sport. Human Kinetics Publishers, Champaign, IL, pp.261-273.
 - 17) Smith MD (1978) : Hockey violence : Interring some myths. (Ed.) Staub WF (In) Sport Psychology : An Analysis of Athlete Behavior. Movement Publications, New York, pp.141-146.
 - 18) 杉山哲司, 杉原隆(1989)：コンタクトスポーツにおける攻撃性：競技場面, 非競技場面における攻撃性の因子構造とその比較. スポーツ心理学研究, 13-22.